Osaka University Knowledge Archive

Title	戦前期日本のデザイン界における大戦ポスターの影響と受容
Author(s)	田島, 奈都子
Citation	デザイン理論. 2011, 56, p. 100-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53407
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

戦前期日本のデザイン界における大戦ポスターの影響と受容

田島奈都子／姫路市美術展

本研究は「大戦ポスター」と総称される第一次世界大戦期に欧米で制作されたポスターが，戦前期わが国のデザイン界に対してどのような影響を与え，かつ受容されたかについて明らかにすることを目的にしている。

戦前期のわが国のデザイン史や広告史研究においてしばしば言及される事象に，1921年に朝日新聞社によって主催された「大戦ポスター展」が挙げられる。この展覧会はついては，その後，記念図録的な『大戦ポスター集』が同社より発行され，現在でもこの書籍は入手が比較的容易であることから，戦前期に開催された「ポスター展（ポスターが展示された催しを含む）」の中では，現在でも比較的広く概容が知られている。また，当時この展覧会や作品に触れた人物からは，その印象の強さや影響の大きさが語られることが多く，これらの言説は今まで具体的に実証されることなく，事実として受けとめられてきた。

19世紀末にわが国に物理的に流入したポスターは，以降その活用法や制作技術，そしてデザインに至るまで，常に欧米を手本として発達してきた。事実，わが国では1900年の「第５回白馬会展覧会」を嚆矢の例として，その後しばしば開催された「ポスター展」において公開されたポスターは，国内で同種のものを制作する際の模範的作例として認識され，戦前期の国内で制作されたポスターの中には，それらを翻案としたような作品が多数存在する。

こうした状況下で公開された「大戦ポスター」の最も早い例は，1914年10月25～31日と11月３～９日の２期にわたって行われた神戸高等商業学校（現神戸大学）における「広告絵札展覧会」にまで遡る。ただし，同展は「大戦ポスター」だけを展示したものではなく，それに特化した展覧会としては，東京の農商務省商品陳列館が1919年８月17～27日に開催した「米国のポスター展」にまで下る。それでも，1910～20年代に何らかの形で「大戦ポスター」が展示された展覧会は19種に上り，雑誌等で図版を伴いながら紹介される機会も多かった。

このように，「大戦ポスター」の公開はさまざまな主催者（≒作品の所有者）によって行われ，現在一般に認識されているように朝日新聞がその先鞭をつけたわけではなく，それどころか実は，同社は他所への貸出しを先に行い，自らの主催展覧会は後塵を拝すような形になっていた。けれども，「大戦ポスター」の影響や受容を考える上で同社の存在は大きい。なぜなら，同社が主催した「大戦ポスター展」は各会場における会期こそ短かったものの，大阪朝日新聞社が地方版を発行していた地域をほぼ隈なく，外地を含む全31カ所に巡回したからである。加えて，会期中にはカラー刷りの絵葉書が販売され，後に編まれた記念図録的な『大戦ポスター集』は定価４円50銭と高価ではあったものの，図版と解説が充実していることが評価され，当時から存在した公共図書館や大学図書館には「購求」という形で所蔵されている。言い換えれば，「大戦ポスター」との接点は，展覧会で実物を見学するという形式だけではなく，その画像を紙雑面で見たり，絵葉書や作品集を購入することによって持たれたのであり，

これら一連の事象が「大戦ポスター」の図像を広く一般市民の間に浸透させる結果をもたらしたのである。特に，『大戦ポスター集』の存在は，先にも触れたような状況が，誰もがそれを参照できる環境を担保したことから，その刊行と相前後して「大戦ポスター」を翻案としたような新聞広告やポスターの制作を大いに助長した。

ただし，そうした翻案作品は「大戦ポスター展」が頻繁に開催されたり，『大戦ポスター集』が刊行された1910年代後半から20年代前半のみに制作されたわけではなく，その後も散発的に制作され，1931年に勃発した満州事変を契機に日本が戦時体制化に突入すると，「大戦ポスター」は再びは新聞・雑誌等で取り上げられたり，展覧会が開催される等，国内でリバイバル・ブームが起こる。例えば，『読売新聞』には1937年10月５日～11月９日まで「欧州大戦当時の列国ポスター紙上展」と題する30回の連載が掲載され，『大阪毎日新聞』には1937年11月７～17日に「家庭と学芸　祖国は求める世界大戦当時のポスター集」と題する全10回の連載が掲載されている。また，東京朝日新聞社は1939年９月12～16日に，東京帝国大学西洋史研究室の教授であった益田元亮が所蔵する作品と，かつて大阪朝日新聞社が収集，展覧した「大戦ポスター」を一堂に会する「大戦ポスター展覧会」を上野松坂屋において開催し，これと連動する形で９月６～16日の『東京朝日新聞』には益田による「第二次欧州大戦問答」と題する全10回の連載が掲載された。

制作から15年以上経過したこの時期に，「大戦ポスター」が国内でリバイバルした背景には，「商業美術」を手がけたことはあっても，それまで本格的な「宣伝美術」の制作経験を持たない日本人にとって，先の大戦時に制作されたポスターは，その存在や内容がまさしく時代にふさわしい手本であったこととも無縁ではない。このため，戦時色が強まるにつれ，「大戦ポスター」の影響を受けた作品は，従来の見られた商業目的のものに加え，時の政府や公共機関が依頼主となって制作された，いわゆる「プロパガンダ・ポスター」としても世に出るようになった。

これまで見てきたように，「大戦ポスター」は度重なる公開と『大戦ポスター集』の刊行，および紙誌への掲載等によって，戦前期のわが国では広告・宣伝物を制作される際の格好の参考作品として長らく存在していた。ただし，「大戦ポスター」に対する眼差しはいつも同じではなく，1910～20年代は最新のデザイン・モチーフだったものの，1930年代以降は「宣伝美術」，「プロパガンダ・ポスター」の手本として存在した。

ちなみに，「大戦ポスター」のデザインは，ポスターに限らず絵葉書，雑誌表紙，マッチ広告，新聞広告等，視覚的な作品のモチーフとしても用いられることも多かった。このことは，それぞれが単独で制作されたとも考えられる一方，広告・宣伝というものがさまざまな媒体に繰り返し用いられることによってその効果を高めるものであり，かつ当時の絵葉書やマッチラベルには，ポスターを縮小した図柄のものが多かったことから，それらしか現存していないものも，実はポスターとして存在した可能性を窺わせ，「大戦ポスター」の影響を考える際には，こうした小型の印刷物にも注意を払う必要性があるように思う。

今後はこうした事実を踏まえて，「大戦ポスター」の影響を受けた作品の発掘と過去の作品との突合せの作業を行い，戦前期に制作された作品相互の影響関係を明らかにしていきたい。